

# 小田原地域の古墳成立への一視点

— 小田原市千代仲ノ町遺跡第Ⅱ地点・  
千代南原遺跡第Ⅵ地点出土の土器様相から —

滝澤 亮

## 1. はじめに

私達は小田原市内において数度の小規模な調査を行ってきた。どれもいわゆるミニ開発に伴う道路部分の調査といったもので遺跡自体の様相が十分に把握出来るものではない。

また原因者が個人あるいは小規模事業者ということもあって、調査費用・期間等制限があるものが多いのが事実である。

このような状況から筆者の力不足ともあいまって、各遺跡の基礎的な整理作業はともかくとして、報告書刊行となると暗礁に乗り上げたままの状況である。これらのことにも起因して、十分な調査成果をあげられないことにもなっている。

今回『考古論叢・神奈河』誌上に稿を起すにあたり、このような状況にある小田原市内の遺跡について一部でも速報的に紹介しようと考えた。そのようななかで、筆者のかねてから興味のある時期の所産である弥生式土器終末から古式土師器の問題に絞って紹介していきたいと思う。

言い訳が長くなるといけないので、本題に入っていくこととする。

我々は小田原市内の千代台地において昨年度来数度の調査を行った。千代台地には、白鳳期から天平時代の創建になると考えられている、所謂「千代廃寺」が存在することで著名である。

このような重要な遺構が存在すると考えられている千代台地においては、調査主体が異なる調査団によって、千代台地上の小字名で大きく分かれたいくつかの遺跡に対してかなりの数、開発に対しての事前調査が行われている（第9図）。

そのなかで私達が調査を行った千代仲ノ町遺跡第Ⅱ地点、千代南原遺跡第Ⅵ地点の2カ所について資料紹介を行った上で、この2地点の土器群が持つ意味について若干の考察を行ってみたい（第1図）。



1. 千代仲ノ町遺跡 2. 千代南原遺跡 3. 永塚遺跡 4. 曾我遺跡 5. 曾我谷津遺跡  
6. 高田遺跡 7. 中里遺跡 8. 三ッ俣遺跡 9. 町畑遺跡

第1図 千代仲ノ町・南原遺跡と周辺の遺跡

## 2. 千代仲ノ町遺跡第Ⅱ地点第4号溝状遺構出土の土器群について

千代仲ノ町遺跡は小田原市千代字仲ノ町142-2番地に所在する遺跡で、個人の宅地造成工事に伴う事前調査として道路部分を対象に平成6年2月23日から4月5日まで調査を行った。調査団は、滝澤 亮を調査団長に、滝澤友子を調査担当者とし、盤古堂考古資料展示室の職員を調査員として編成した。

当遺跡からは、竪穴住居址2軒（いずれも古墳時代後期）、溝状遺構6条（弥生時代～古墳時代頃と考えられる）、土壇・ピット等が検出されている（第2図）。

このなかで今回紹介するのはSD04と呼称している溝状遺構から出土した土器であるが、遺構についても説明が必要であると考えられるため遺構の方から説明していく。

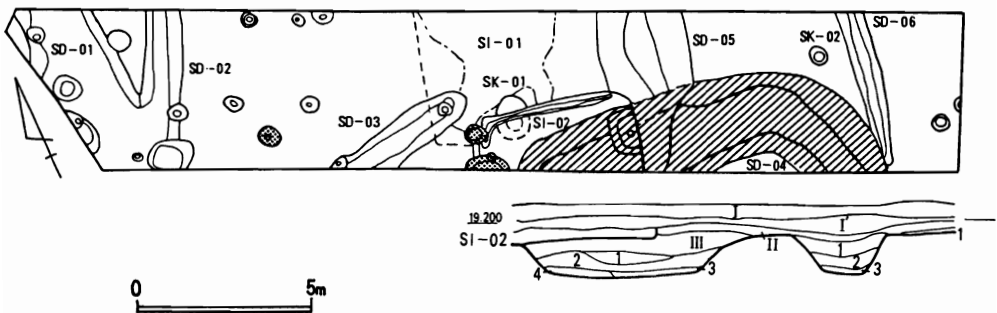
SD04（写真1・2） この遺構は、調査区の東側において溝の一部が検出された。残りの大半の部分は、隣地の調査区外に伸びているものと考えられる。また西側の一隅はSI02と呼称している古墳時代後期の住居址が切っている。また、SD05とした弥生時代に属すると考えている南北に伸びる溝状遺構を切っている。

平面形は「コ」の字状になると考えられる溝の一部分が検出されている。前述したように、遺構の大半の部分が調査区外であるため正確な平面形は不明である。

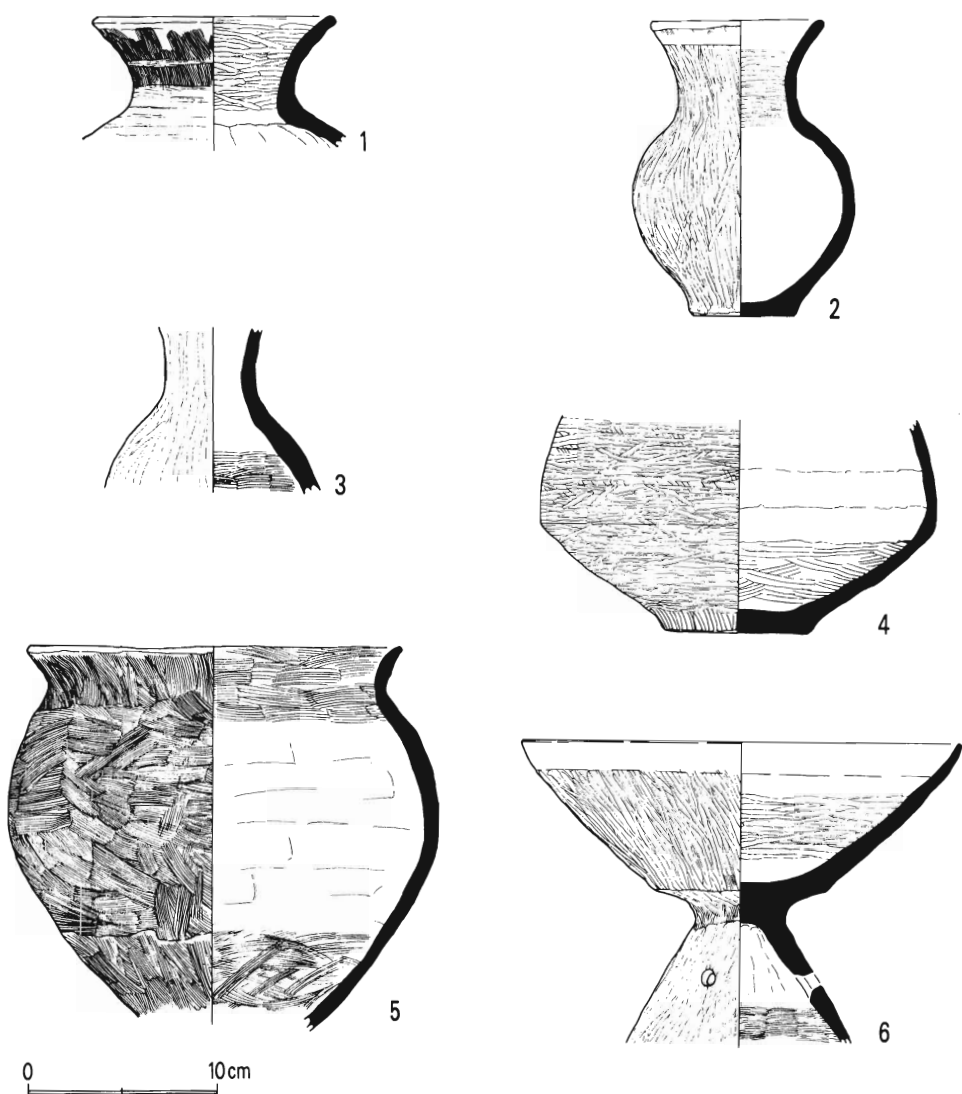
遺構の規模は確認面での幅が2.6mほどで、下場の幅は約0.8～1.4mをはかる。断面は「U」字に近い逆台形で、深さ8mをはかる遺構である。

検出されている溝の一边が8m前後でコーナを造っており、溝断面の規模の割には小さい点が特色でもある。

今回の調査区は遺構全体に対してごく一部にトレンチ状に調査を行っただけなので断言することはむずかしいが、これらの点から考えるに単純な方形周溝墓と考えるよりは、前



第2図 千代仲ノ町遺跡 第Ⅱ地点全体図



第3図 千代仲ノ町遺跡 第Ⅱ地点 SD04出土

方後方型あるいは、前方後円型を呈する周溝の一部と考えておきたい。

さらに前述したような特徴や時期的なものを考え合わせると、前方後方型を呈する方形周溝墓の前方部前面の溝の一部と考えてもよいのではないかと考えている。

また次に詳述するように、この遺構からはほぼ完形及びそれに近い形で6点の土器が墳丘から転落したような状況で周溝内下部の方から出土している。

**SD04出土の土器**（第3図1～6） 前述したように本遺構からは6点の土器が出土し

ている。以下、1～6について説明していく。

1. 短頸壺。口径12.4cm。口縁部破片での出土である。単口縁で頸部が「く」の字状をなしている。外面は、口唇部ヨコナデ、口縁部は縦方向へのヘラミガキ、その下はナデで仕上げている。内面は、横方向への細かいヘラミガキ、そして肩部より下ではヘラケズリによって仕上げている。

2. 小形壺。口径9.1cm。胴部最大径11.8cm、底径5.2cm、器高15.8cm。完形で出土している。単口縁で球形の胴をした小型の壺である。外面は、全面に縦方向のヘラミガキで仕上げられている。内面は、口縁部のみ横方向のヘラミガキで仕上げている。口唇部は、丁寧にナデで仕上げているが、一部にかすかにハケメが残る。

3. 小形壺。肩部付近の小破片での出土である。単口縁で細頸の小型品になると思われる。外面は、縦方向へのヘラミガキによって仕上げている。内面は、胴部に横方向へのハケメが残る。

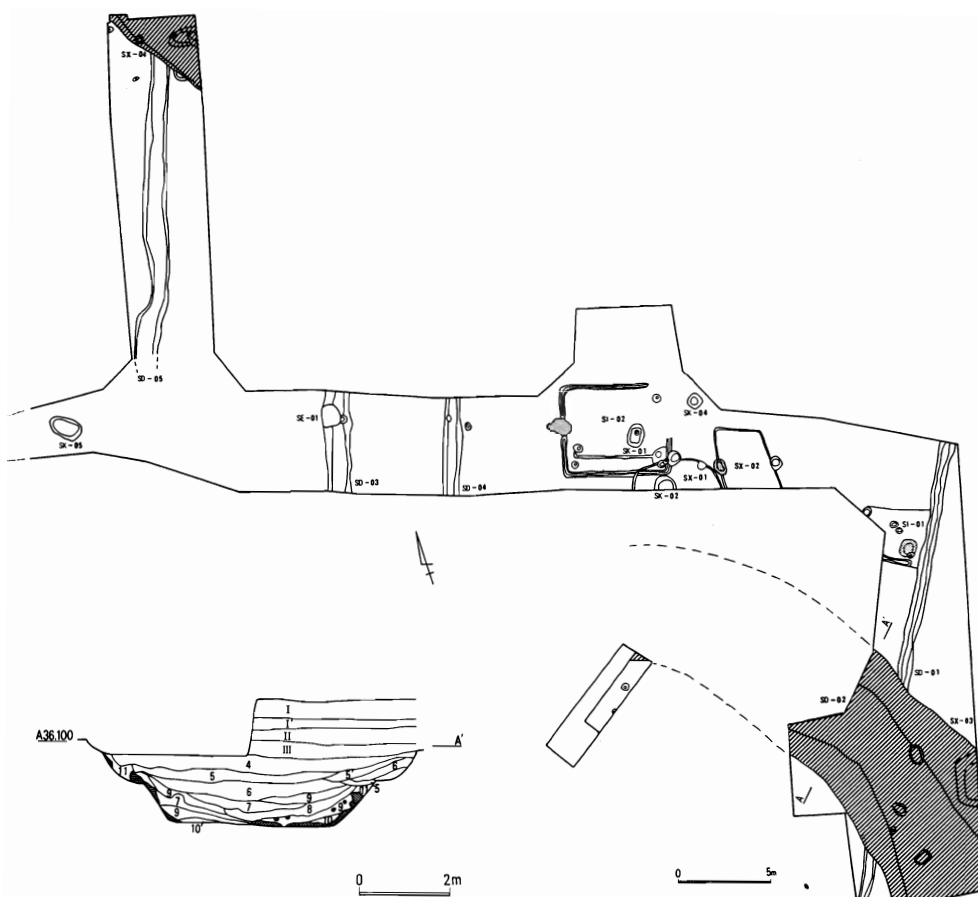
4. 壺。底径7.4cm。胴下半部の破片での出土である。胴下半部の最大径の部分に稜をなしている。外面は、横方向への丁寧なヘラミガキ、底部付近は縦方向へのヘラミガキによって仕上げている。内面は、底部付近に横方向へのハケメ残り、その上にはあきらかな輪積み痕が数段観察される。

5. 台付甕。口径19.4cm。台部を欠損しての出土である。口縁部は「く」の字状をなし、球形に近い胴部をもち台部がついていたと考えられる。外面は、口縁部が縦方向のハケメ、胴部は横から斜めにかけてのハケメ、そして下部は分割成形したらしく縦方向のハケメで仕上げている。また内面もそれに対応するように、下部はハケメ、その上の胴部は横方向へのヘラケズリ、口縁部は横方向へのハケメで仕上げている。

6. 高坏。口径23cm。逆「ハ」の字状に大きく開く坏部の下に明瞭な稜を有し、「ハ」の字状に大きく開く脚部を造っているが、脚部の下の方は欠損している。脚部中位には、3孔を穿っている。外面は、全体的に縦方向のヘラミガキで丁寧に造られており、口唇部はさらにナデで仕上げている。内面も坏部は横方向への細かいヘラミガキで仕上げられ、口唇部は外面同様にナデで仕上げている。脚部内面は、軽いヘラケズリの後に下部の方だけ横方向のハケメで仕上げている。

### 3. 千代南原遺跡第VI地点第4号特殊遺構・第2号溝状遺構出土の土器について

千代南原遺跡第VI地点は小田原市千代南原553～556番地に所在する遺跡で、民間業者の宅地造成工事に伴う事前調査として取り付け道路部分を対象に平成6年4月25日から6月7日まで調査を行った。調査団は滝澤 亮を調査団長に、小池 聡を調査担当者とし、盤



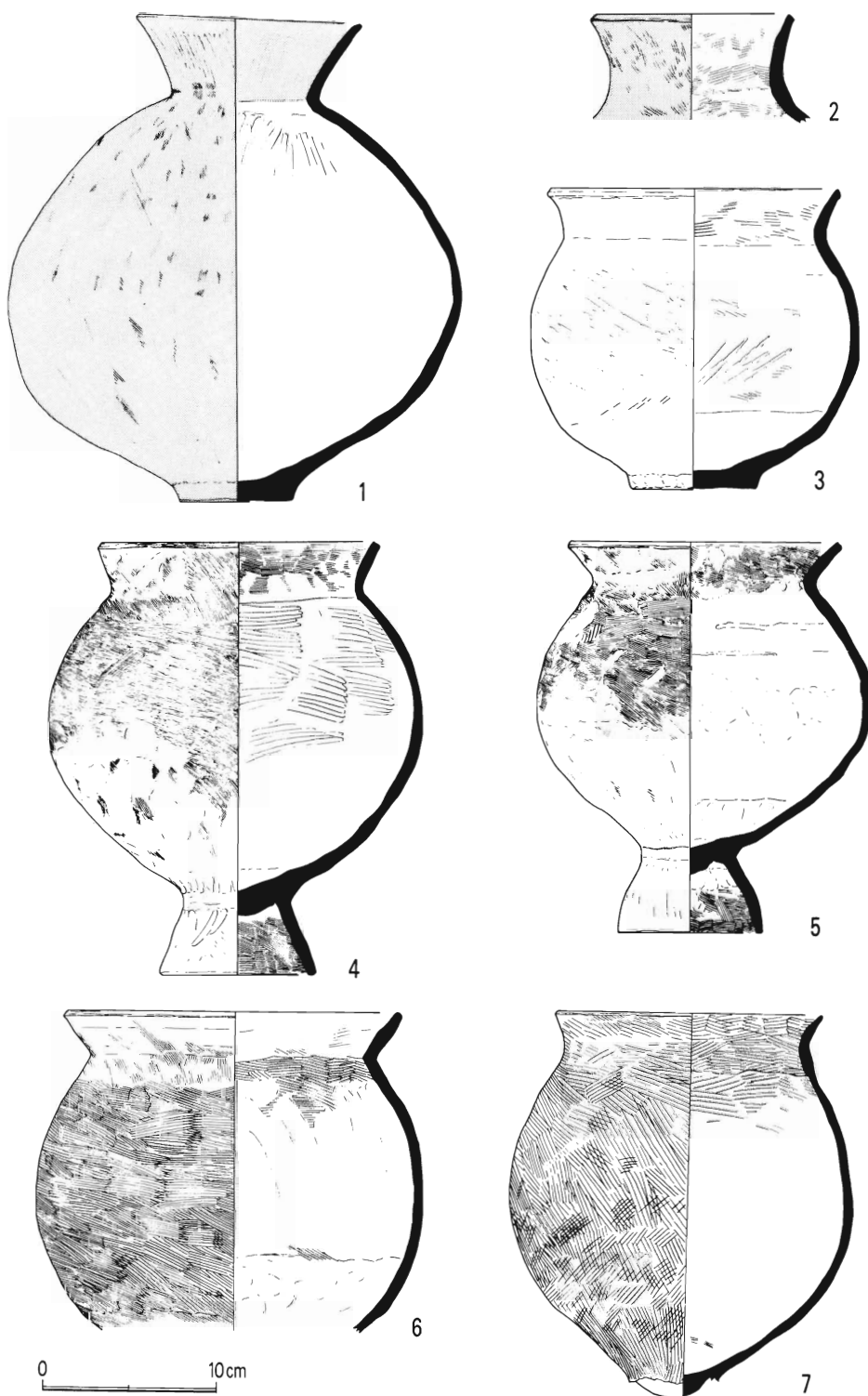
第4図 千代南原遺跡 第VI地点全体図

古堂考古資料展示室の職員を調査員として編成した。

我々が千代南原遺跡内で行う発掘調査は初めてであるが、過去には5度にわたる調査が行われている。隣接する千代南原遺跡第IV地点の報告書が刊行されているので、それを参照されたい。

当遺跡からは、竪穴住居址2軒、特殊遺構4基、溝状遺構5条、土壌・ピット等が検出されている(第4図)。このなかで今回紹介を行うのは、SX04と呼称している特殊遺構から一括して出土している土器群と、SD02と呼称している古墳の周溝址と考えられる溝状遺構から出土した土器である。これについても遺構について説明を行い、次に土器について見ていきたい。

**SX04** (写真3・4) この遺構は調査区北西側の一番隅において検出された。南北に延びる溝状遺構SD05によって切られている。調査区の関係からごく一部分の調査しか行え



第5図 千代南原遺跡 第VI地点 SX04出土土器(1)

なかった。

当初は方形周溝墓等の溝状遺構と考えたが、いわゆる断面が「V」・「U」字状にならずに一方の立ち上がりしか確認されなかったことから、一応特殊遺構として呼称することにした。

またこの遺構からは、後述するように土器が多量に一括投棄されたような状況で出土している点も注目される。このような状況を考えると、後述するSD02と何らかの関係をもつものかもしれない。

**SX04出土の土器**（第5～7図1～23）　今回は多量の土器が出土しているため、完形品を中心に23点の土器を紹介することにした。また図示はしていないが、S字口縁台付甕の破片及びタタキメ甕の破片が検出されている。

1. 短頸壺。口径12.6cm、底径6.4cm、器高27.6cm。ほぼ完形で出土している。単口縁で、「く」の字状を呈する口縁部に、ほぼ球形の胴部をなし平底である。外面および内面口縁部に赤彩が施されている。

2. 短頸壺。口径11cm。口縁部破片での出土である。単口縁で、口縁部とあまり差のない胴部が付く小型品と考えられる。外面は赤彩が施され、内面はところどころに横方向へのハケメが残っている。

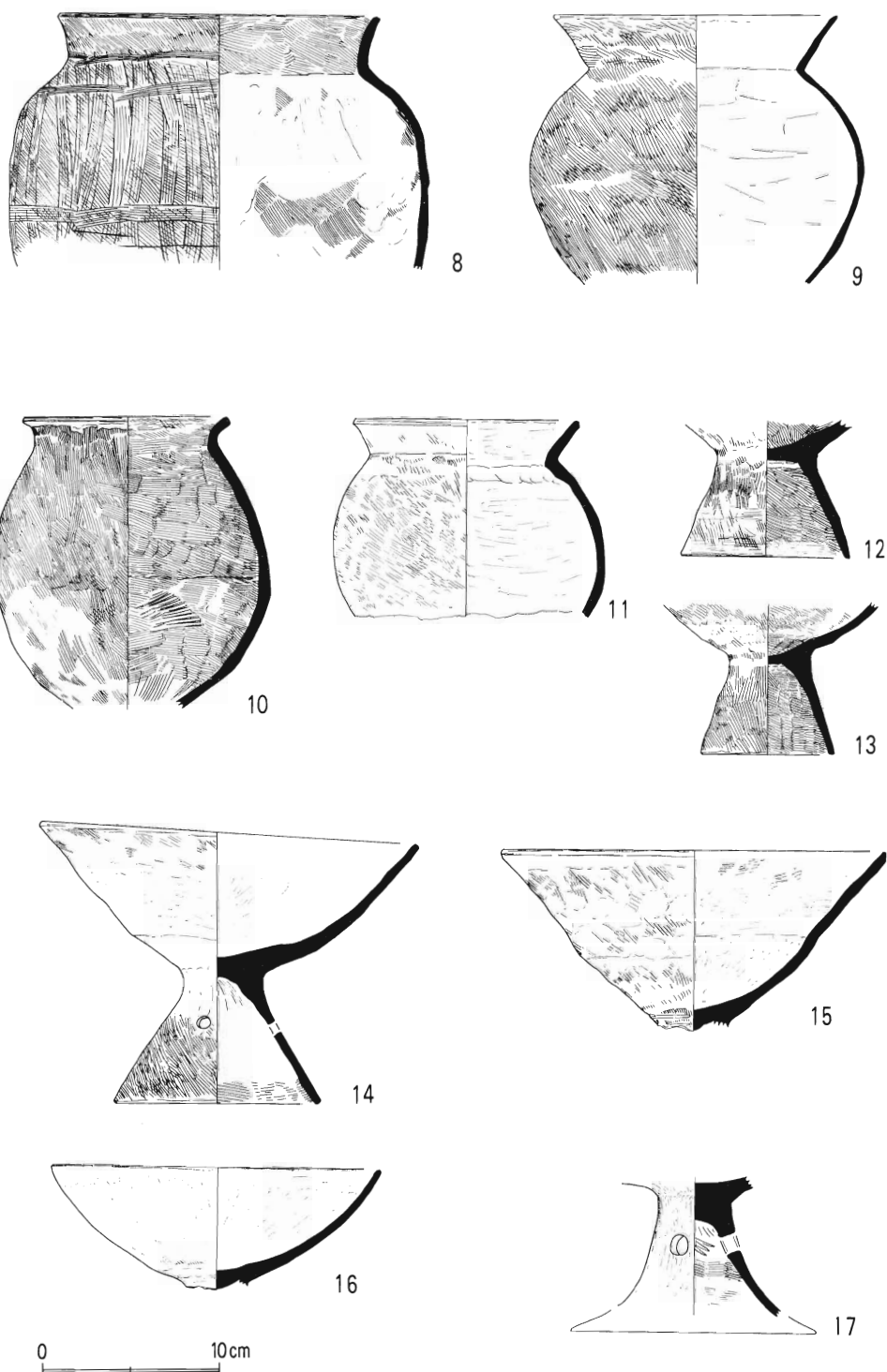
3. 小形甕。口径16.4cm、底径6.9cm、器高17.3cm。ほぼ完形で出土している。「く」の字状をなす口縁部に球形の胴部を成す平底の小型のナデ甕である。口縁部内面に、部分的にハケメが残る。

4. 台付甕。口径15.5cm、底径8.4cm、器高24.6cm。ほぼ完形で出土している。口縁部は「く」の字状をなし、胴部はほぼ球形で短めの台部を付ける。脚台部は分割成形で、ハメコミ式である。外面は、口縁部から胴部にかけて細かいハケメを斜め方向に施し仕上げている。内面は、口縁部では横方向への細かいハケメ、胴部ではヘラナデで仕上げている。

5. 台付甕。口径15.2cm、底径8.1cm、器高22.3cm。ほぼ完形で出土している。口縁部は「く」の字状をなし、胴部は球形をなし短めの台部を付ける。脚台部は分割成形で、ハメコミ式である。良く観察すると台部の接合痕が観察できる。外面は、口縁部から胴部にかけて細かいハケメを斜め方向に施しているが、胴部以外はナデで仕上げられているためハケメは目立たない。口縁部内面は、横方向への細かいハケメが残る。胴部内面はナデで仕上げられているが、輪積痕が数段残っている。台部は外面がナデ、内面が横へのハケメである。

6. 台付甕。口径18.8cm。胴部下部から台部を欠損して出土している。口縁部は「く」の字状をし、胴部はほぼ球形をなしている。胴部外面には、横方向へのハケメによって仕上げられている。胴部内面の上方には、横方向へのハケメが残る。その他の部分はナデで





第6図 千代南原遺跡 第VI地点 SX04出土土器(2)

仕上げているためハケメは消えている。

7. 台付甕。口径15cm。甕の部分は完形で台部のみ欠損して出土している。脚台部はハメコミ式である。口縁部はゆるやかな「く」の字状をなし、胴部はやや下部に最大径をもつ楕円形に近い形である。外面は、全て若干粗めのハケメで仕上げられ、口縁部付近は横方向、胴部にかけては斜め方向である。内面は、口縁部付近に横方向のハケメがみられる。

8. 台付甕。口径18.4cm。甕の部分の破片で出土している。口縁部は単口縁で直立気味で、それに倣型に近い胴部が付く。台部の存在は予想されるが欠損して不明である。外面は、斜め方向の細かいハケメで仕上げているが、胴部のみその上から模様状に縦横にさらにハケメで仕上げている。内面は、口縁部が横から斜めのハケメ、胴部は斜めのハケメの後に軽くケズリで仕上げている。

9. 台付甕。口径11cm。甕の胴部下半から台部を欠損しての出土である。口縁部は、「く」の字状をなし球形の胴部を有する。外面は、斜め方向の粗めのハケメで仕上げている。内面は、口縁部ナデ、胴部は軽いケズリ状である。

10. 台付甕。口径11.4cm。甕の胴部下半から台部を欠損しての出土である。口唇部はヨコナデで面取りをしており、断面が逆「く」の字状になっている。口縁部から肩部にかけて逆「ハ」の字状になり、楕円形に近い胴部が付いている。外面は口唇部を除いて縦方向のハケメ、内面はほぼ全部に横方向のハケメで仕上げている。

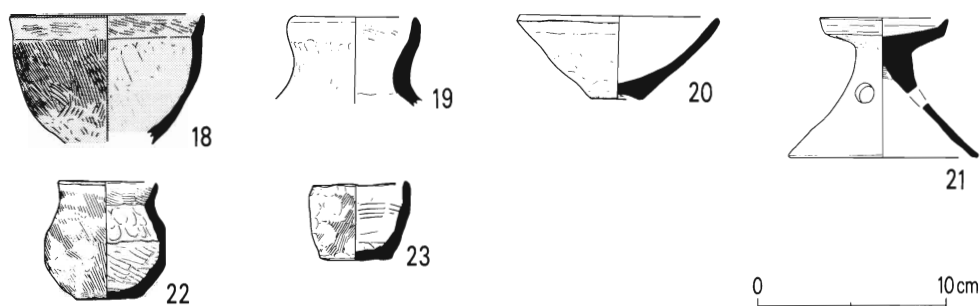
11. 台付甕。口径12.4cm。甕の胴部下半から台部を欠損しての出土である。口唇部はヨコナデで面取りをしており、断面が逆「く」の字状になっている。口縁部から胴部にかけては断面「く」の字状になり、ほぼ球形の胴部が付く。外面は、胴部が斜め方向のやや粗めのハケメで仕上げている。

12. 台付甕。底径9.4cm。脚台部から胴底部にかけての破片で出土している。内外面ともハケメで仕上げている。

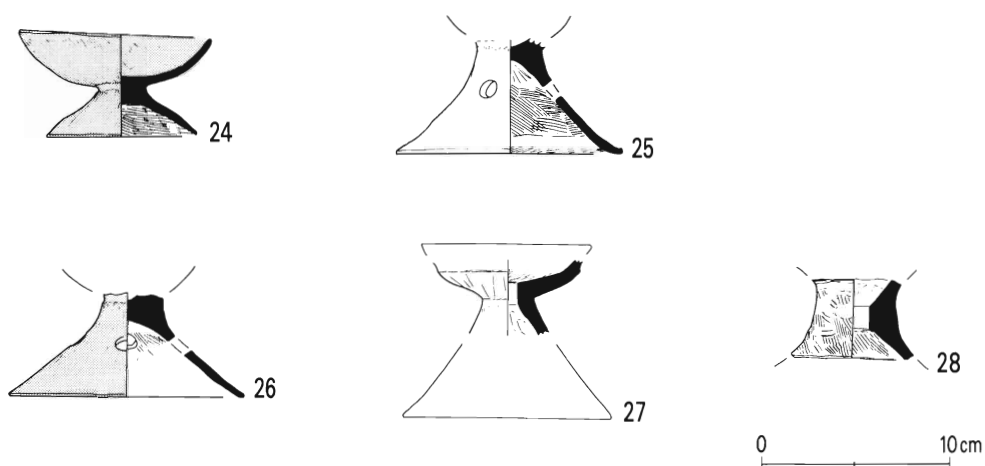
13. 台付甕。底径7.4cm。脚台部から胴底部にかけての破片で出土している。胴部は球形になると思われる。内外面ともハケメで仕上げている。

14. 高坏。口径21.2cm、底径11.4cm、器高15.5cm。完形で出土している。坏部が大きく逆「ハ」の字状に開き、下位に僅かに稜をもつ。脚部は、「ハ」の字状をして中位よりやや上方に3孔を穿っている。坏部外面には若干ハケメが残るが、ほぼナデで仕上げている。内面も丁寧にナデで仕上げている。

15. 高坏。口径21.4cm。脚部を欠損して出土している。坏部は深く大きく逆「ハ」の字状を呈し、中位よりやや下方にかすかに稜をもつ。内面中位にもかすかに稜をもつ。脚部の形状については不明である。外面は、口唇部はヨコナデで、その下の坏部には若干の粗いハケメが残っているが、部分的にナデている。内面は、全体的にナデで仕上げているがごく一部にハケメが残る。



第7図 千代南原遺跡 第VI地点 SX04出土土器（3）



第8図 千代南原遺跡 第VI地点 SD02出土土器

16. 高坏。口径18.5cm。脚部を欠損して出土している。坏部は比較的大きく浅い碗状をなす。脚部の形状については不明である。内外面とも軽いヘラミガキで仕上げている。

17. 高坏。脚部破片で出土している。破片であるため詳しい形状は不明であるが、脚部はあまり大きく開かない「ハ」の字状を呈すると考えている。中位よりやや上方に3孔を穿っている。外面は、ヘラミガキ、内面は、横方向へのハケメで仕上げている。

18. 碗。口径10cm。底部付近を欠損して出土している。丸碗状になり平底の底部が付くものと考えている。外面は、口縁部ヨコナデ、体部は縦方向のハケメで仕上げている。内面は口縁部にハケメを残し、体部は軽いヘラケズリ状で仕上げている。内外面ともに赤彩を施されている。

19. 小形壺。口径6.9cm。口縁部付近が破片で出土している。若干内彎する口唇部からすばまった口縁付近までで、その下に楕円形の胴部が付くと考えている。内外面ともに軽いケズリの後にナデで仕上げている。

20. 鉢。口径10.4cm, 底径2.8cm, 器高4.5cm。完形に近い形で出土している。逆「ハ」の字状を呈し、小さめの底部が付く。外面には、指頭痕を残しナデで仕上げている。内面もヨコナデで仕上げている。

21. 小形器台。口径6.6cm, 底径9.8cm, 器高7.6cm。完形で出土している。器受部が短く立ち上がり稜を有する。脚部は、ほぼ中位に3孔を穿っている。外面は器受部がヨコナデ, 脚部はヘラミガキで仕上げている。内面は、器受部がヨコナデ, 脚部はナデで仕上げている。

22. ミニチュア壺。口径5.1cm, 底径2.9cm, 器高6.2cm。完形で出土している。手づくねで作っている。外面はハケメで、内面の口縁部はハケメで、胴部表面は手づくね痕が、下部はヘラミガキ痕が残っている。

23. ミニチュア坏。口径5.1cm, 底径3.8cm, 器高3.9cm。完形で出土している。手づくねで作っている。外面はハケメの後に、指頭痕を残している。内面は部分的に粗いハケメを残している以外は、ナデで仕上げている。

SD02（写真5・6） この遺構は調査区南東において検出され、ほぼ南北に延びる溝状遺構SD01に切られている。また大土坑が検出された千代南原遺跡第IV地点は、東側に隣接する地点の調査である。

平面形は非常に大規模な円形を呈すると考えている。このことは後からこの溝状遺構の性格を確認するために入れたトレンチでの遺構の検出状況からもうかがえる。規模は調査区域の確認面での幅が7.2～8.1m前後、下場での幅は3.2～4.6m前後、断面は「U」字に近い逆台形で、深さは確認面から1.5m以上をはかる。

調査区の関係からごく一部分の調査しか行えなかったが、本遺構を古墳址と考えるならば周溝外周で直径約50m規模、周溝内径で36m前後のものになると考えられる。

第4図を参考に断面を観察すると、溝の上部である4層からは千代廃寺のものと考えられる瓦等が出土している。また、溝内下部および底部付近からは、後述するような土器片が多量に出土している。今回図示した5点以外には、今回の調査区内から図示できるような土器はあと若干存在するのみである。

これらの点から考えると、相模国の初期国分寺ともいわれている千代廃寺が存在して廃棄されるまでの時点においては、若干の浅い溝状をなしていたことがうかがえる。千代廃寺の寺域付近に存在すると考えられる当遺構の性格を考える上で興味深い点がある。

SD02 出土の土器（第8図24～28） 今回図示した24～28までは全て高坏と器台であるが、このほかにS字口縁台付甕、甕、壺等の破片を確認している。

24. 小形高坏。口径10.5cm, 底径8.1cm, 器高5.4cm。ほぼ完形で出土している。坏部

に稜をもたず碗状になるもので、小さく逆碗状に開く脚部が付く。外面および坏部内面が丁寧にヘラミガキで仕上げた後に赤彩されている。脚部内面は、横方向のハケメで仕上げている。

25. 小形高坏。底径12cm。脚部のみの出土である。「ハ」の字状に小さく開く脚である。脚部中位に3孔が穿たれている。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横から斜め方向のハケメで仕上げている。

26. 小形高坏。底径12.2cm。脚部のみの出土である。「ハ」の字状に開く脚である。脚部やや上位に4孔が穿たれている。外面は縦方向のヘラミガキの後に、赤彩が施されている。内面は一部にハケメが残るが、その上からナデで仕上げられている。

27. 小形器台。有稜をなす器受部の付近の小破片での出土である。

28. 器台。連結部の破片での出土である。外内面ともにハケメが残っている。

## 4. おわりに

### 遺構の性格について

すでに紙幅を費やして説明をしてきたように、千代仲ノ町第Ⅳ地点の溝状遺構は方形周溝墓、それも前方後方形になる可能性が高いと考えている。

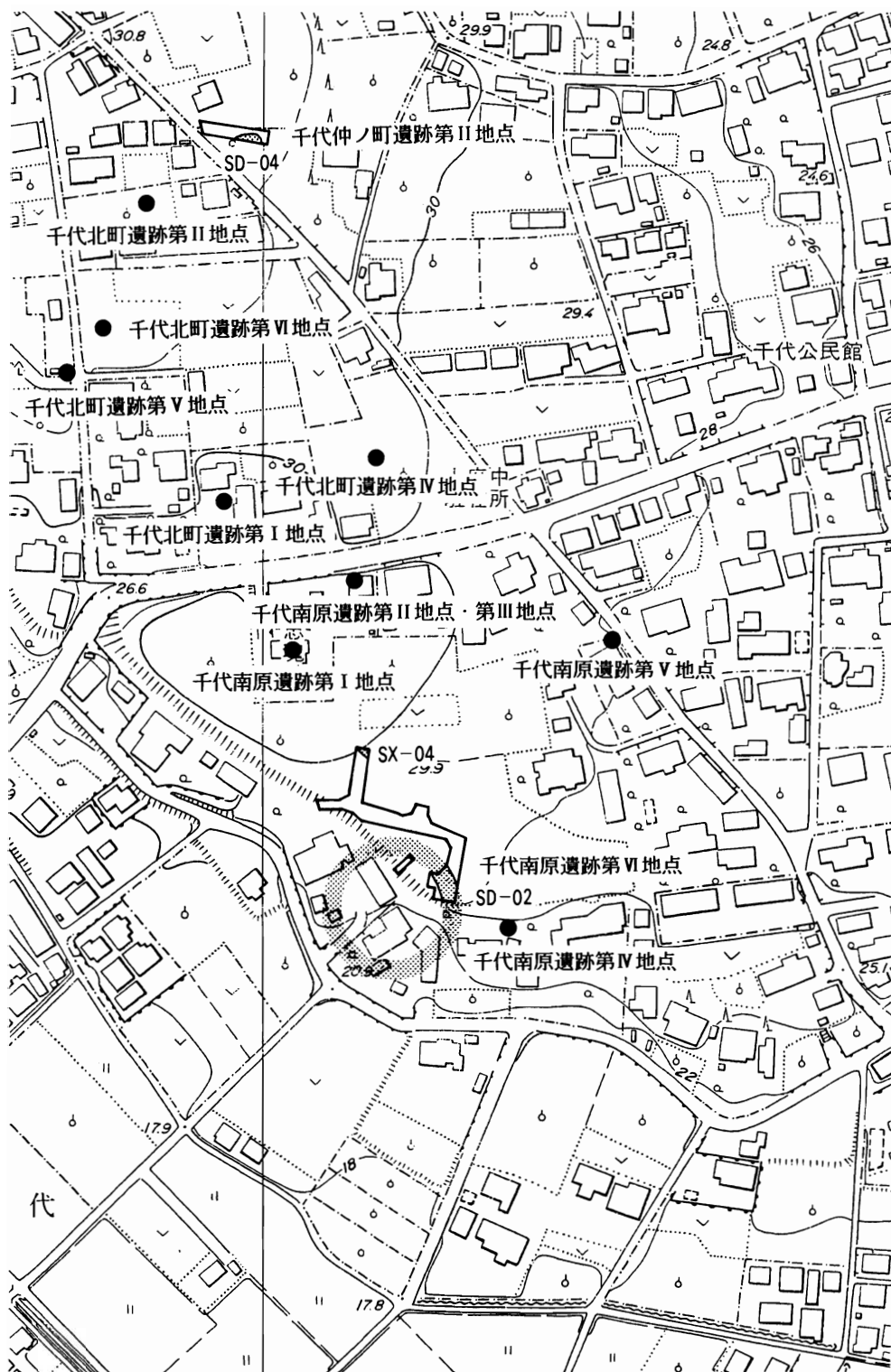
これについては近隣で調査され報告書が刊行されている神奈川県横浜市稲ヶ原遺跡A地点及び静岡県富士宮市丸ヶ谷戸遺跡が参考になるので、両例と比較してみたい。

稲ヶ原遺跡A地点例は、前方部前面に区画の溝をもたずブリッジ状に残した形で前方部ともいうべき台状部を造っている。

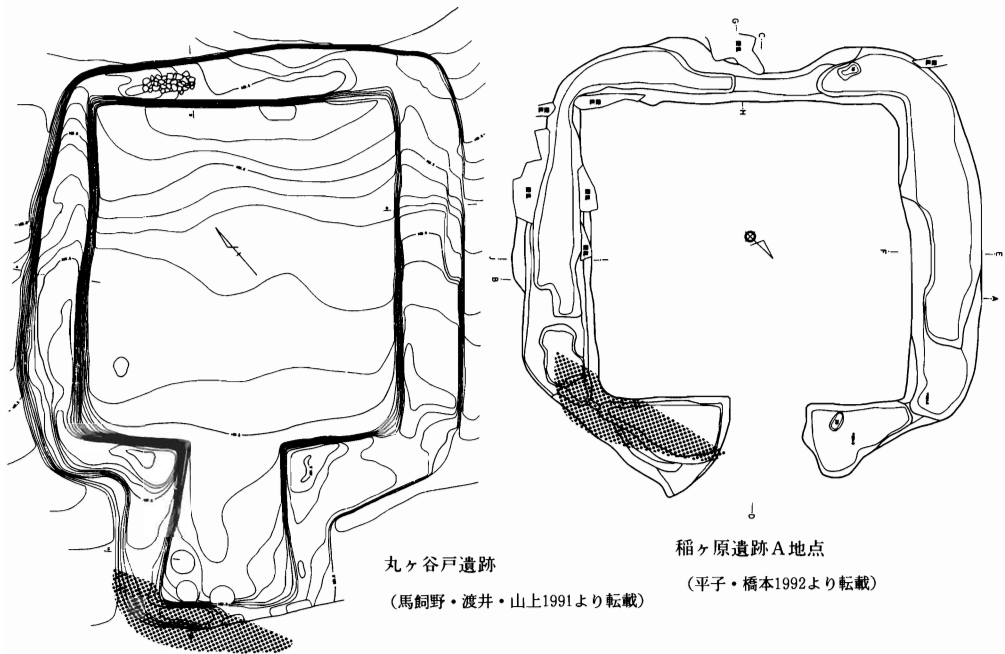
丸ヶ谷戸遺跡例は、前方部まで溝が全周している形である。前方部前面の溝の一部分が未調査であるが、他の部分の溝に比較してやや狭い状況が読み取れる。

第10図はこの両遺構に千代仲ノ町例をスクリーントーンに写して重ねてみたものである。なにぶんにも調査面積が狭いため、可能性以上のことが言えない点が残念である。

また千代南原第Ⅵ地点のSD02と呼称している大溝は、古墳の周溝と考えられる。周溝外周部での直径は、約50mにもなると考えられる。現在、この古墳が立地する丘陵部は先端が民家によって削られており、周溝の大半もその折りに削られてしまったと考えられる(第9図)。しかし、このような古墳が存在していたことは、古記録等いずれの文献にも記録されていない。調査の結果から考えれば、千代廃寺がまだ存続していた頃には、この古墳の周溝は浅い溝になっていたとおもわれる。が、マウンドの状況については不明である。常識的に考えれば、この地に千代廃寺が造営されるまでには約400年近くの隔たりがあるので、その間に徐々に削平されてしまったのであろう。これについても調査面積が狭いためこれ以上のことに言及できない点が悔やまれる。



第9図 千代台地における調査例と千代南原遺跡 第VI地点 SD02推定復元図



第10図 千代仲ノ町遺跡 第Ⅱ地点 SD02と他例の比較図（一部改変）

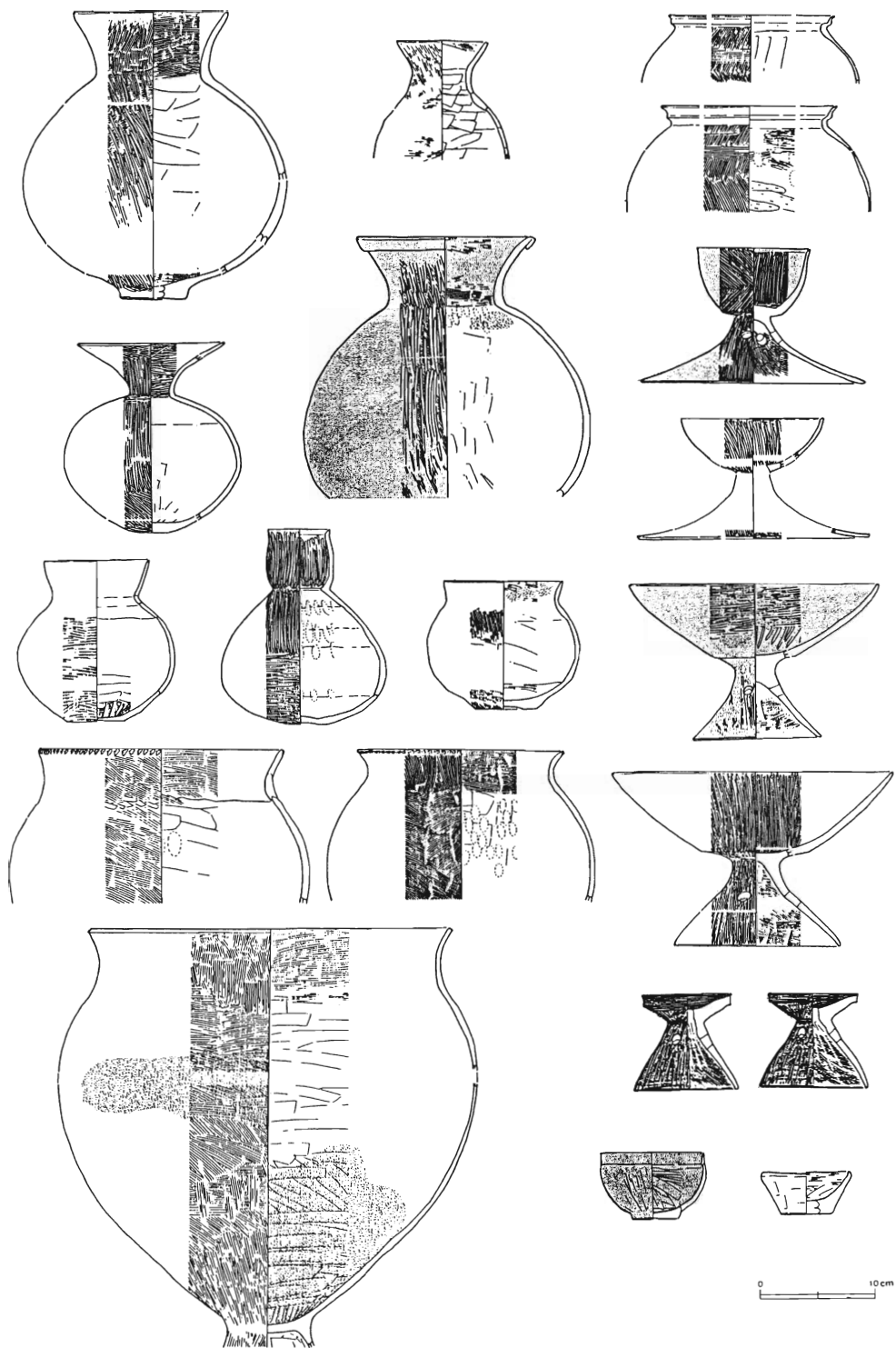
## 土器について

小田原市域出土の該期の土器については、公開されている資料が少ないのが現状である。まして千代台地に限って見れば今回報告した千代南原Ⅵに隣接する千代南原Ⅳの資料が公表されているのみである（第11図）。そのようななかで、今回遺構と共に出土状況がはっきりとした形で土器群が把握できた点は、今後の研究に基礎的な資料となるであろう。

さて以上詳しく見てきたように、千代仲ノ町ⅡSD04出土の土器群は千代南原ⅥSX04・SD04出土の土器群に若干先行することは、土器の様相や遺構的に考えても妥当なことであろう。

また千代南原ⅣSD01出土の多量の土器群は、千代南原ⅥSX04出土の土器群と非常に組成が似ている点が注目される。特に留意されるのは、両遺構ともS字口縁台付甕やタタキメ甕の破片が出土している点である。これらの土器組成は、私がかねてから述べている該期の土器編年のⅡ期に相当することは明白であろう。

また千代南原ⅥSD02の土器は、それらと同時期か若干下降する時期を考えている。もう少し詳細に遺物を検討してから最終的な結論は出したいと考えているが、たとえⅢ期になるにせよ、この時期にこの地にこれだけ大規模な遺構を造営できる人々がいたことは、注目に値しよう。



第11図 千代南原遺跡 第Ⅳ地点1号土壇出土主要な土器実測図  
(諏訪間他 1987より転載)



以上いくつかの推測をまじえて意見を述べてきたが、本稿の意図するところは、今回資料紹介を行った土器群が該期の小田原地域の土器編年を考える上で重要であると考えたからにはかならない。遺構の性格については、なにぶん小面積での調査であるため今後の調査の状況によっては、今回の推測が全般的外れになる可能性もあり得ることを記して筆を置きたい。

本稿を草するにあたり小出義治先生をはじめ、長谷川厚、西川修一、坂口滋皓、渡井英誉等の各氏、また地元小田原市教育委員会の関係者には数々のご教示とご指導を頂きお世話になった。

事実関係の記載および挿図・図版の作成に当っては、調査団の滝澤友子、小池 聡、有馬多恵子、細井佳弘、石井敦子の諸氏をはじめとする盤古堂考古資料展示室の皆さんの労を煩わした。記して謝意を表すものである。

最後に文末になってしまったが、本稿の執筆を本誌にご推挙いただいた神奈川県考古学会の曽根博明氏、同じく編集担当の村田文夫氏には何かとお世話をおかけした。記して謝意を表すものである。

## 引用・参考文献

- 大塚 初重 1985 「東国古墳発生論」『論集 日本原史』 吉川弘文館
- 河野 一也 1993 「奈良時代寺院成立の一端について(Ⅳ)」『神奈川考古第29号』 神奈川考古同人会
- 諏訪間順他 1987 「千代南原遺跡第Ⅳ地点」『小田原市文化財調査報告書22集』 小田原市教育委員会
- 滝澤 亮 1984 「神奈川県」『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会
- 1990 「小型平底埴の系譜」『相武考古学研究所研究紀要第1集』 相武考古学研究所
- 滝澤 亮他 1994 「大塚戸遺跡」『大和市文化財調査報告書第60集』 大和市教育委員会
- 塚田 順正 1986 「千代南原遺跡第Ⅱ・第Ⅲ地点の調査」『小田原市文化財調査報告書21集』 小田原市教育委員会
- 平子 順一・橋本 昌幸 1992 『稲ヶ原遺跡A地点発掘調査報告』 財団法人 横浜市ふるさと歴史財団
- 馬飼野行雄・渡井 一信・山上 英誉 1991 「丸ヶ谷戸遺跡」『富士宮市文化財調査報告書第14集』 富士宮市教育委員会



写真1 千代仲ノ町遺跡 SD04全景（東側から）



写真2 千代仲ノ町遺跡 SD04全景（北側から）



写真3 千代南原遺跡 SX04 遺物出土状況



写真4 千代南原遺跡 SX04全景（東側から）

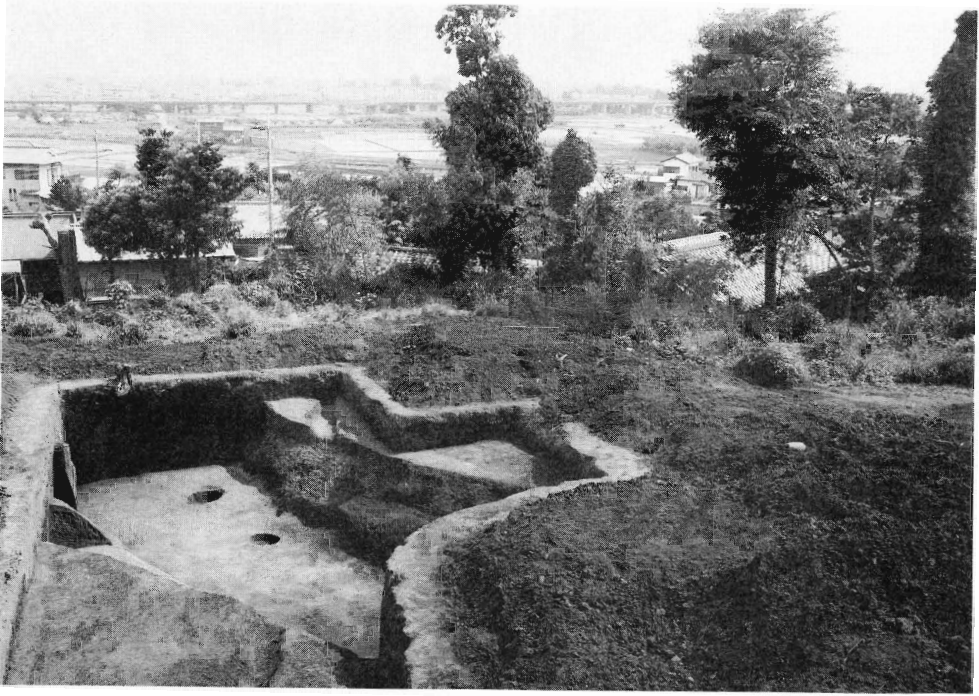


写真5 千代南原遺跡 SD02 全景（北東側から）



写真6 千代南原遺跡 SD02 全景（北側から）